



Title	〈逃走＝闘争〉する「言葉」：梅崎春生「桜島」
Author(s)	高橋，啓太
Citation	国語国文研究，126，16-38
Issue Date	2004-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93665
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_126-16-38.pdf



〈逃走Ⅱ闘争〉する「言葉」

——梅崎春生「桜島」——

高 橋 啓 太

一 モノローグとダイアローグ

梅崎春生の「桜島」は一九四六年九月、同人誌『素直』に発表された。この短篇によって、梅崎は第一次戦後派として脚光を浴びることになるのだが、例えば同じく第一次戦後派である野間宏の『真空地帯』（河出書房、一九五二年二月）と比較した場合、その評価にはどんな違いがあるだろうか。『真空地帯』は、その軍隊の描き方をめぐって大西巨人らが参加する論争も起こったが、いずれにしてもそこには野間の軍隊批判の姿勢をうかがうことができる。

一方、同じように軍隊を舞台にしている「桜島」は、軍隊批判という観点から評価されることはあまりない。例えば、和田勉は「野間宏は『真空地帯』で、軍隊が人間を兵士という戦争を遂行する道具にしてしまう恐ろしさや、軍隊というピラミッド型の階級組織を支配する権力の法則を暴露し、政治的・社会的な立場から反戦の思

想的徹底を企図しているが、『桜島』は、個人的な視点から戦時下を真摯に生きる人間の内面を掘り下げており、反戦・厭戦を読者に呼びかけ、社会を啓蒙しようとする意図はほとんどない」と指摘している。また、荒正人は「こんどの戦争で、日本人は初めから終りまで受身の立場に立っていた。抵抗という言葉を念頭に浮べることもなかった」として、『桜島』を支える美学は、音楽でいえば、モノフォニックである^(三)と述べている。これも和田の指摘と同様で、「桜島」は軍隊や国家などへの批判を欠如させ、個人の内面を描いた自閉的なテキストであると言っているわけである。これらの評価とも重なる形で、しばしば「桜島」を分身的存在との自己内対話とする読みもある^(四)。

磯田光一も「梅崎の『桜島』では『個人』の運命はたんに不可避の現実から強いられるものとしてあり、現実には異なる異和感を彼はどのような思想的名分と結びつけることもない。外界はたんに不条理なものとして存在し、個人はたんにそれに耐える以外に為すす

べを知らない^(五)」とやはりその自閉性を指摘するが、その特徴自体をマルクス主義という「思想的名分」を基軸にした同時代の作家と比較して高く評価する。

また、「桜島」の風景に注目した開高健は、冒頭部における風景描写が「末期の眼」であると指摘したうえで、「発端で詠まれた坊津の自然と、最終部で詠まれる桜島の自然にはほとんど何の変化も生じていないように思われる^(六)」といかにも日本的な紋切り型の自然美がこのテクストを挟み込んでいることを批判的に見ている。また本多秋五は、「私」には「無量の思いがありながら、彼にあつてはそれが一度も思想の形をとらない。内と外との『風景』に託されるだけである(中略)そのことが、われわれにとつてこの作品が文句なしに美しくみえる理由であり、この作品について出色の批評を書きにくい理由である^(七)」と述べ、「思想」を語らず、風景が特権化されていると指摘している。「桜島」が感覺的、感傷的であるとか近代文学の伝統に忠実であると言われる一因である。

さらに別の評価も見ておこう。高口智史は「見張兵の死から吉良(主人公村上兵曹の上官―引用者注)との対立に至る、村上の精神の転回のドラマ」を見出し、それは「私」が「孤立し自閉した空間を打ち破り、〈他者〉との間に〈対話〉を復活させ、そしてその対立・葛藤のなかで自己という主体を新たに認識する^(八)」ことなのだと言っている。また、田中実とは「吉良兵曹長との闘いは、〈私のなかの他者〉との間での相克^(九)」という「自己内対話」と呼ぶことができ、「それを超えることで〈私〉はじめて〈私のなかの他者〉から〈私の外の〈他者〉」と向き合う基盤を手に入れ、そこから〈対話〉の可

能性が劈けてくる^(一〇)」と述べる。高口が「吉良との対立」を〈他者〉との〈対話〉とみなしているのに対し、田中は「桜島」の終わつた後に「ポリフォニーの可能性」を想定している点で両者の論旨は異なっていると言えるのだが、共にモノローグ的な「私」がやがて主体性を確立して〈他者〉と関わっていくという単線的な物語を見出していることは間違いない。

これらの先行研究の読みを整理するために、便宜上モノローグ・ダイアログという言葉を使いたい。和田や荒、磯田は「私」が外部に働きかけずにモノローグ的だと読んでいえる^(一一)し、風景の美を指摘した開高や本多もそうである。一方、高口と田中はモノローグからダイアログへという読みを提示しているが、実際にはこれはモノローグに過ぎないものだ。だが、そのことについては後で具体的に検討することにし、先行研究をとりあえず区別するためにダイアログという言葉を用いることにする。

本稿では、これまでの読みが則っていたモノローグ・ダイアログという枠組みそれ自体を祖上に乗せ、その問題点を検討してきた。そして最終的には、「桜島」がそうした枠組みでは捉えきれない戦略的なエクリチュールを持っていることを明らかにしたい。その読みは「桜島」のみならず、他の諸作品においても政治性の希薄さが指摘され、文学史的な評価として市井小説作家と位置付けられてきた梅崎を再検討する意義を示すことにもつながるはずである^(一二)。

二 思考の頓挫

まず考えたいのは、「桜島」がモノローグであると言った場合、その内実は何なのかということである。それについて検討することから始めたい。

「桜島」の冒頭部には、美しい自然の風景が描かれている。「七月初、坊津にいた」という一文から話が始まるように、坊津にいた「私」の下に桜島の基地への転属命令が届くところから始まる。そして、桜島に向かう朝、「私」は坊津の風景を眺める。

生涯再びは見る事もない此の坊津の風景は、おそろしいほど新鮮であった。私は何度も何度も振り返り、その度の展望に目を見張った。何故此のように風景が活き活きしているのであらう。胸を嚙むにがいものを感じながら、私は思った。此の基地でいろいろ考え、また感じたことのうちで、此の思いだけが真実ではないのか。

「私」は「生涯再びは見る事もない」というように死を意識しながら、「坊津の風景は、おそろしいほど新鮮であった」「風景が活き活きしている」と感じている。そして、「此の基地」で考えたり感じたりしたことの中で「此の思いだけが真実ではないのか」というように、風景の美しさを特権化する。それ以外の「いろいろ考え、また感じたこと」は排除されてしまうのである。つまり、外の現実を視

界から排除し、風景と一体化することで思考を停止しているというのが、ここでの「私」の態度なのである。それが、「末期の眼」から見た風景であると言われてきたゆえんである。

この後、桜島に向かう途中で一泊することになった「私」は、耳のない妓と出会い、「ねえ、死ぬのね。どうやって死ぬの。よう。教えてよ。どんな死に方をするの」と聞かれることになるが、この質問に答えることのできなかつた「私」は、桜島に転属した後も死を意識して、しばしば外の現実や他者を無視して思考を停止させている。例えば、「私」が見張り兵と初めて話をした場面を見てみたい。この場面で見張り兵は、吉良などの「志願兵上りの下士官や兵曹長」は「手のつけられない俗物になっているか、またはこちこちにひからびた人間になっているか、どちらかです」と言うのだが、それに対して「私」は「そうだね」とは言いながらも、「彼はひからびた男でもなければ、また俗物でもない。全然違った別の型の人間だ。志願兵の頃から、精神棒などで痛めつけられていた人間、他の人間なら諦めて忍従して行くところを、おそらくは胸に悲しい復讐の気持を、自ら意識せずに育てて行つたにちがいない」と考えている。そして、「三日前のこと」である「通信科の兵隊を集めての故もない制裁の場における、彼の偏執的な挙動」を思い出す。

その日、自分の部下たちが吉良に理不尽な制裁を加えられていると聞いた「私」は「制裁の場」に行き、「痼疾のように、吉良兵曹長の心に巣くう何物かが、彼をかり立てているようであった。私の理解を絶たし、おそらくは彼自身にも理解出来ない鬼のようなものが、彼の胸を荒れ狂っているようであった」とやはり吉良の内面を考え

ようとしていたのだが、その後すぐに「所詮、彼等は私と全く異った世界に住む男達であつた。そして、私は、吉良兵曹長の中に住む鬼を、理解するには、あまりにも疲れ過ぎてゐる。疲れすぎてゐるというよりは、そのような無縁なものを考えるより、私には、迫り来つた自らの死のことが氣になつてゐたのだ」と、「自らの死」に意識を収束させることになる。つまり、吉良という他者を自分とは「無縁なもの」として遠ざけ、考えることをやめてしまふわけである。そして、この出来事を回想し終わつても見張り兵との会話はもう語られることがない。場面がここで切り替わつてしまうのだ。

「沖繩は既に玉砕したし、大和の出撃も失敗に終つた」状況において、桜島は日本の最前線基地ということになり、「私」はいわば死地に赴いてゐるということになる。この死地において、「私」は軍隊など権力に対する視線や思考を欠落させたまま、「宿命」を意識せざるを得ないのである。

そして、「宿命」へと意識を収束させていく「私」の姿は、見張り兵や吉良と関わつていく場面にも見受けられることである。見張り兵が「私はねえ、近頃、滅亡の美しさということを考えますよ」「廃墟というものは、実に美しいですわねえ」と言つたのに対して、「私」は「美しいかねえ」と言うだけである。だが、後に「麦酒の配給があつた」日に「居住区」で宴会を開いた時、「村上兵曹。死ぬのはこわいか」と吉良に挑発的に聞かれた「私」は、「このまま此の島で、此処にいる虫のような男達と一緒に捨てられた猫のように死んで行く、それではあまりにも惨めではないか」と考え、「吉良兵曹長。私も死ぬなら、死ぬ時だけでも美しく死のうと思います」と答えるの

である。吉良がそれに対して、「顔は歪んだまま、汚い血潮は、泥と一緒に固まつてしまふ。日が暮れて、夜が明けて、夕方鴉が何千羽とたかり、肉をつつき散らす」ような戦場の無残な死骸の様子を語つても、「私」は桜島に向かう途中で出会つた谷中尉が「美しく死ぬ、美しく死にたい、これは感傷に過ぎんね」と言つてゐたのを思い出しながら、「虚無が、谷中尉にしろ吉良兵曹長にしろ、その胸に深い傷をえぐつてゐるに過ぎぬ。私がつ美しく死にたいというひそやかな希願と、何の関係があるか」と吉良を意識から排除し、「宿命」に処する自分の思いを頑なに保持しようとするのである。

「美しく死にたいというひそやかな希願」とは、美しい死を見るも一人の超越的な自己を想定することで成立するものだ。自分は死ぬかもしれないが、そのような超越的な自己は無傷なままである。それは、死を先取りしようとする試みにほかならない。言わば、存在を抹消する暴力性を持つた死を内面化することで「私」は自己完結しようとしてゐるのである。それがまさにモノログということであり、「自らの死」という終着点に向かつて組成される死の物語なのである。

だが、はたして「桜島」は従来の研究が見出してきたようなモノログの物語であると断定できるのだろうか。そのことについて次に見ていくことになるが、後に検討していくように、モノログからダイアログへと読みもまた、事後的に一つの物語を構成することになる。それに対して本稿で試みたいのは、「桜島」をそうした物語ではなく、今ここに根ざす『小説』として読むことである。

三 揺らぐモノログ

ここではまず、「宿命」に規定されるモノログには回収できないような語りの揺らぎについて検討することにしよう。例えば、「私」はこうも語っている。

一言で言えば、私は、私の宿命が信じ切れなかったのだ。何故私が、小学校の地理では習ったけれども、訪れる用事があろうとも思えなかった此の南の島にやって来て、そして此处で滅亡しなければならぬのか。この事が私に合点が行かなかったのだ。

「宿命」をただ受け入れようとするのではなく、「信じ切れぬ」というように「私」はそこから距離を置こうとしている。無論、それは権力批判という形を取っておらず、その意味では自閉的なのだが、先行研究はこの自閉性をモノログと安易に単純化して読んでいたのではないだろうか。では、こうした箇所をさらに見ていこう。暗号兵である「私」は、「八月一日の真夜中」に「敵船団三千隻見ユ。針路北」という「作戦特別緊急電報」を受信した。「船団は明かに東京方面を目指してい」るようである。そこで「私」は「応召するまで私が住んでいた本郷のことや、また友達のこと」を思い浮かべ、「私が自分に落ちるものと覚悟していた悪運が、今や彼等の上に置き換えられようとしている」と、「烈しい苦痛を伴」いながらも「も

し東京に上陸するならば、桜島にいる私はたすかるのではないか？」と考える。「応召するまで」住んでおり、しかも「友達」までいたにもかかわらず、自分が助かるかもしれないと期待しているのである。

これは、東京が被害をあうかもしれないという現実に対する無関心な態度の表明であると言えるだろう。「烈しい苦痛を伴」つてはいるが、自分は助かるのではないかという発想は、「自らの死」を基準にして現実や他者を無視しているという点では同じだからだ。だが、この直後に「サキノ敵船団ハ夜光虫ノ見誤リナリ」という電報が飛び込んでくる。「私」はこの電報を読み、「すべては茶番に過ぎないではないか」と思うが、この場面では「私」のモノログ的な語りが中断してしまうのである。

また、見張り兵の死に直面する場面においては、「私」は揺さぶりをかけられる。見張り兵がグラマンの機銃掃射で死んだ時に、「私」は「滅亡の美しさを説いたのも、此处で死ななければならぬことを自分に納得させる方途ではなかったのか」と思い、「(滅亡が、何で美しくあり得よう)」「(生き抜こうという情熱を、なぜ捨てたのか)」と涙を流す。廃墟の美しさを語っていた人間が美とは無縁な死を迎え、その死体を見ることで美しい死の虚妄を知る。これはつまり、「私」が死体にまなざし返されるということ、外部を遮断して「美しく死にたいというひそやかな希願」を持っていた「私」に見張り兵の死という現実が突きつけられたことを意味している。

それゆえ、「桜島」は死の側から紡がれるモノログの物語としてまとめられるテクストではない。むしろ「私」は、モノログがは

ぐらかされるような出来事に随所で遭遇してしまうのである。末尾部においてもそのような揺らぎがある。

末尾部は「玉音の放送」があった日、つまり八月十五日の状況を語っている。「玉音の放送」とは言うまでもなく終戦を伝えるラジオ放送のことなのだが、桜島基地ではラジオの調子が悪く「玉音の放送」を聞くことができなかった。「私」は暗号兵であり、「此の部隊に關係ある電報は一通り目を通していたから、その方面の事態には通じていた」が「桜島に来て以来、新聞も読まずラジオも聞かない」ため、「玉音の放送ということがどういう意味を持つのか」はわかってはいない。それどころか、基地ではいよいよ本土決戦が始まるのではないかと判断し、「通信長」が「こういう情勢で何時敵が上陸して来るか予測を許さんから、その時にあわてないように、不用の暗号書、あまり使わない暗号書は、焼いてしまったがよろう」と命令を出す始末である。そして、暗号書を焼却しながら「私」は桜島岳を眺める。

ぼんやり焰の色を見ていた。焰は、真昼の光の中にあつて、透明に見えた。山の上は、しんと静かであつた。物の爆ぜる音だけが、静かさを破つた。兵隊が話し合う声が、変に遠くに聞えた。なびく煙の向うに、桜島岳が巨人のようにそびえていた。その山の形を眺めているうちに、静かな安らぎが私の心に湧き上つて来た。

退路を断たれようと、それでいいではないか。何も考えることは止そう。従容とは死ねないにしても、私は私らしい死に

方をしよう。私の死骸が埋まって、無機物になつてしまつたあとで、日本にどんなことが起り、どんな風に動いて行くか、それはもはや私とは關係のないことだ。慌てず、落ち着いて、死ぬ迄は生きて行こう。

ここで「私」はもう美しい死を願つてはいない。無論、「何も考えることはよそう」と思考を停止し、「私の死骸が埋まって、無機物になつてしまつたあとで、日本にどんなことが起り、どんな風に動いて行くか、それはもはや私とは關係のないことだ」と「自らの死」に意識を取束させているという意味で、ここでの「私」もモノローグ的である。死の美学ではないにせよ、「死ぬ迄は生きて行こう」という決意も死に規定されたものだ。しかしこの後で、「玉音の放送」が「終戦の詔勅」だったという情報が飛び込んできて「桜島」は終わる。ここでも、「私」のモノローグがはぐらかされるのである。戸塚麻子の言うように、これらの特徴を『「桜島」では、常に「一つの体系」が構築されかかったとたん、それを逸らす、或いは崩す形でそれは流されていつてしまふ^(三)』とまとめることもできるだろう。

また、こういうモノローグの揺らぎは語りの位置に関わる問題である。「桜島」の作中の時間は、「七月初、坊津にいた」から「玉音の放送」までの約一ヶ月月半であり、語り手である「私」はその経緯を戦後の位置から語っているということになる。このことは、「私」は夜光虫の見間違いや末尾部の出来事に注釈を加えられる位置にいるということだ。つまり、過去に起こつた出来事を事後的に再構成することで、「敵船団」の襲来という情報が夜光虫の見間違ひで

あったことを前もって告げておくなど、揺らぎを解消した形で語ることもできたはずなのである。逆に言えば、過去に対するそのような介入がないことで、不意の出来事に遭遇していく「私」が前景化していくのではないか。例えば、「玉音の放送」は正午にあったものであり、それを聞くことができなかった「私」は暗号書を燃やしなから、「死ぬ迄は生きて行こう」と決意する。つまり、「私」がそう決意した時点で「終戦」を迎えていたということである。しかし、そうした事後的な整理は行われることなく、あくまでも「玉音の放送」の内容を知らずにいる「私」が語り続ける。

例えば、戦場での死骸について語る吉良を無視して「美しく死にたいというひそやかな希願」を語った後に見出せるのも、そうした「私」の姿ではないだろうか。

私とは、何だろう。生れて三十年間、言わば私は、私というものを知ろうとして生きて来た。ある時は、自分を凡俗より高いものに自惚れて見たり、ある時は取るに足らぬものと卑しめてみたり、その間に起伏する悲喜を生活として来た。もはや眼前に迫る死のぎりぎりの瞬間で、見栄も強がりも捨てた私が、どのような態度を取るか。私という個体の滅亡をたくらんで、鋼鉄の銃剣が私の身体に擬せられた瞬間、私は逃げるだろうか。這い伏して助命を乞うだろうか。あるいは一身の矜持を賭けて、戦うだろうか。それはその瞬間にのみ、判ることであった。三十年の探究も、この瞬間に明白になるであろう。私にとって、敵よりも、此の瞬間に近づくことがわかった。

ここでの「私」は、あくまでも「眼前に迫る死のぎりぎりの瞬間にふみとどまろうとしている。それは、「宿命」という地点に立つモノログではなく、生の側から続けられる「宿命」についての思考である。このように思考する地点こそ「桜島」の現在と呼ぶべきだろう。また、モノログが不意の出来事によって揺らいでいくのも、死の側に立とうとする「私」が事後的な視点をとれず、生の現在を自覚することを余儀なくされるということではないのか。だとすれば、「死ぬ迄は生きて行こう」という決意もまた、あくまで現在を生きていく態度として考えられるのではないか。しかも、最後に「玉音の放送」の内容を知ってその決意が空転することになっても、「私」は「宿命」を達観する境地に達するわけではなく、やはり揺らぎ続けるのである。

死に規定されたモノログを拒み続ける「桜島」の現在。だが、その「私」の揺らぎとは心理の変化などではない。内面に還元されるのであれば、それは最終的にモノログ・ダイアログという枠組みに規定される物語に過ぎない。

四 言語化の蹟き

ここまで検討してきたように、「桜島」はやはり「私」の単純なモノログとしてまとめられるテキストではないのだが、次に浮上してくるのは、モノログからダイアログへという単線的な読みが「桜島」を物語化してしまっているという問題である。今度は、「私」が言語化の困難に突き当たっていることに注目してみよう。

例えば、冒頭部においても「私」は語る対象をうまく把握できていない。坊津にいたころは、「毎日、崖を滑り降りて魚釣りに行ったり、山に楊梅を取りに行ったり、朝夕峠を通る坊津郵便局の女事務員と仲良くなったり、よそめにはのんびりと過し」ていた。それでも「此のような生活をしながらも、目に見えぬ何物かが次第に輪を狭めて身体を締めつけて来るのを、「痛いほど感じ始め」ていた。先述したように、その直後桜島への転属命令が下る。それを知った夜に「私」は酒を飲んで酔っ払い、崖から落ちてしまう。そして、「断れ断れになった意識の中で、私は必死になって荒涼たる何物かを追っかけていた」。このように、「私」は「目に見えぬ何物か」「荒涼たる何物か」という言語化できない曖昧な対象について語っている。

また、「電報が一通、届け方が遅れた」だけで当直士官であった掌暗号長に叱られた「私」は「ひとりで腹を立て」るのだが、その憤怒は「誰に、ということとはなかった。掌暗号長ではない。私を此のような破目に追いこんだ何物かに、私は激しい怒りを感じた」と語られる。また別の場面では、「家にも便りを出さない」でいることに「自責の念」を感じ、さらに「私の兄は、陸軍で、比島にいる。おそらくは、生きて居まい。弟はすでに、蒙古で戦死した。俄かに荒々しいものが、疾風のように私の心を満たした。此のような犠牲を払らって、日本という国が一体何をなしたのだらう。徒勞と言うには、——もしこれが徒勞であるならば、私は誰にむかって怒りの叫びをあげたら良いのか？」と思うなど、言語化できない対象への怒りが繰り返されるのである。このような言語化の躓きは、「日本という国が一体何をなしたのだらう」という思索が国家や軍部へ

の批判につながらないということにもなり、一面では先行研究において指摘されてきたような政治性の希薄さを示すことになるだろう。しかし、語り得ぬものを語ろうとする「私」の試みはこれで終わりではないのだ。

先述したように、開高は「桜島」は冒頭と末尾で風景描写が円環を描くように閉じられると言っていた。「玉音の放送」が「終戦の詔勅」だと知った末尾における桜島の風景を見てみよう。

崖の上に、落日に染められた桜島岳があった。私が歩くに従って、樹々に見え隠れした、赤と青の濃淡に染められた山肌は、天上の美しさであった。（中略）風景が涙の中で、歪みながら分裂した。私は歯を食いしばり、こみあげて来る嗚咽を押えながら歩いた。頭の中に色んなもの入り乱れて、何が何だかはつきり判らなかった。悲しいのか、それも判らなかった。ただ、涙だけが、次から次へ、臉にあふれた。手のひらで顔をおおい、私はよろめきながら、坂道を一步一步下っていった。

冒頭部の坊津の風景は、すでに確認したように「自らの死」と「風景が生き活きしている」ことが結びつけられ、「此の思いだけが真実ではないのか」と自分の思いを特権化するような「末期の眼」が見たものであり、死の側から語られるモノログである。この「最終部」でも確かに、桜島岳を眺めた「私」はその風景を「天上の美しさ」と形容しており、その意味では冒頭部と最終部で同様の風景描写が反復していることになる。

しかし、桜島岳は「天上の美しさ」と形容されながらも、その風景は「涙の中で、歪みながら分裂し」、「何が何だかはつきり判らなかった。悲しいのか、それも判らなかつた」というようにいかなる感情とも結びつけられないことがない。先に紹介したように、本多は「桜島」においては「無量の思い」が「風景」に託されるだけである」と言っているが、ここで「私」は内面を言語化することに挫折している。その意味で、末尾部の風景描写は単なる冒頭部の繰り返しではなく差異化しており、モノローグから逃れ去つていゝと言えのである。つまり、言語化の蹟きとは「私」が自己完結的なモノローグの可能性に突き当たつてゐることを示しているということだ。では、モノローグを語ることに挫折するテキストにいかなる「言葉」を見出すことができるのか。

先に、「桜島」には語られる内容に対する語り手の事後的な介入がないと述べたが、前に挙げた論文において田中も、「桜島」が戦後の時点から叙述されたテキストでありながら、「語つてゐる現在の認識、あるいは批評が顕在化せず、〈語り手〉としての〈主体〉は語られてゐる時間に溶解してゐる」と指摘し、テキストの終わつた地点に「『言葉以前の悲しみ』から『言葉』が生成されるための〈主体〉の成立」と他者との〈対話〉を読み込むに至る。そこでは、「私」が「言葉」を獲得するプロセスとモノローグからダイアローグへと発展していくプロセスが、パラレルに捉えられてゐることがわかるだろう。

事後的な視点が顕在化してゐないことを認めながらも、「桜島」を「私」の成長の物語とするのは、始まりと終わりを眺めることのでき

る俯瞰的な位置から読んでゐるからである。それは換言すれば、「言葉以前の」モノローグを乗り越え、〈他者〉とダイアローグを行う「言葉」を獲得した〈主体〉を確立するという物語が読み込まれてゐるということである。繰り返すように、言語化の蹟きはモノローグの可能性を意味しており、また「私」の語りもモノローグに回収できない揺らぎを見せてゐるのだが、ダイアローグの「言葉」を獲得した位置から目的論的に組織される物語において、こうした細部は〈主体〉が形成される以前の状態として、単一的にモノローグと括られてしまふのだ。そして、その物語を語るのは物語の終わりに立つ〈主体〉である。モノローグからダイアローグへとゐる物語は〈主体〉が語り、〈主体〉に行き着く。つまり、それは〈主体〉の内面に還元されるモノローグに過ぎないのである。

しかし「桜島」は、言語化することに置いていた過去を通過して、「私」が「言葉」を獲得したのだという〈主体〉形成の物語として読まれてはならない。なぜならそうした物語は、実際に「言葉」によつて書かれてゐる「言葉以前」をコンスタティヴ（事実確認的）に把握して「言葉」に先立つ混沌とみなし、そこから「言葉」を獲得するまでを追うという転倒を隠蔽することで成立してゐるものに過ぎないからだ。「言葉以前」は書く行為を通してしか存在し得ない。目を向けなければいけないのは、「言葉以前」が「言葉」で書かれることによつて生成されるというパフォーマティヴ（行為遂行的）な位相なのである。だから、「言葉以前」から「言葉」を獲得することで形成されるという主体化のプロセスは転倒したものであるし、そのプロセスを語る語り手として田中が要請するような「語られてゐる

時間に溶解し」た「主体」の「私」も、やはり終わりから出発する転倒を通して見出された存在でしかない。この意味で、「桜島」は主體化のプロセスそのものを問題化しているのである。

いずれにしろ重要なものは、事後的な位置からではなく現在の位置から「桜島」を読むことである。それは、「桜島」を「小説」として読むということでもあり、「言葉以前」と語る「言葉」そのものに目を向けるということにほかならない。従来の先行研究が見てこなかったのは、このエクリチュールとしての「桜島」なのだ。

五 書く／書かれる「言葉」

「居住区」で宴会を開いた日に、「私」は吉良が「大きなビルディングが、すっかり跡かたも無いそうだ」と広島状況語るのを耳にし、また「ソ連軍が国境を越え」たという電報を受け取っていた。そして、ソ連参戦について隣の兵隊が話していたのを聞いた日に、「私」は遺書を書くとする。

「私」は、見張り兵という他者の死については語ることはできても、自分の死については同じように語ることはできない。つまり、「自らの死」は「眼前に迫る死のぎりぎりの瞬間」で自分がどんな態度を取るのかわからないというように、常にこれから到来するものとして、未来的なものとして語られるほかないのである。すでに述べたように、超越的な自己を想定する「美しく死にたいというひそやかな希願」は、その「眼前に迫る死のぎりぎりの瞬間」を飛び越えて死を先取りしようとする試みである。その「私」を含めて、原理的

に誰も自分の死そのものを対象化することは不可能である。

しかし、遺書は死を前提に、死後に読まれることを想定している書簡である。言わば、遺書は死を内面化して書かれるもの、死の立場から書かれるものであり、もちろん死ななければ効力を発揮しない。それはつまり、「私」が言わんとすることをそのまま再現し表象させる試みであり、まさに「私」の中で自足するモノローグなのだと考えよう。だが、「私」は遺書を書くことに挫折する。

書くことが、何も思い浮ばなかった。書くことと思うことが沢山あるような気がしたが、いざ書き出そうとすると、どれもこれも下らなかつた。誰に宛てるという遺書ではなかつた。次第に腹が立つて来た。私は立ち上つて、それを破り捨てた。

壕を出、丘の上の方に登って行きながら、私は哀しくなつて来た。遺書を書いて、どうしようという気だろう。私は誰かに何かを訴えたかつたのだ。しかし、私は何を訴えたかつたのだろう。文字にすれば嘘になる。言葉以前の悲しみを、私は誰かに知ってもらいたかつたのだ。

遺書はそれがどんな内容であるにしろ、誰かに宛てられるものはずだ。けれども、家族にも便りを出していなかつたのに、それは「誰に宛てるという遺書ではな」かつた。また、その内容も「文字にすれば嘘になる」ようなものでしなかつた。「私」は、このように遺書を書くことの不可能性に突き当たること、内面を再現し表象して完結しようとするモノローグに頓挫する。無論、それも言語化

に躓いているという事態である。

しかし、問題はそれだけにとどまらないのである。というのも、遺書を書くことができないという事態は確かに言語化の躓きを示しているが、にもかかわらず、ここではそれが「文字にすれば嘘になる、言葉以前の悲しみ」と記述されるというパラドックスが孕まれているからである。つまり、書くことができなかったことを書いてしまっているということだ。このように、遺書をめぐり書くという行為を前景化させているという意味において、「桜島」はメタフィクション的でもある。

ところで、梅崎自身が暗号兵であった経験が反映されているとすれば指摘されるように、「私」は暗号兵である。桜島への転属命令も自ら暗号を翻訳して知るのだし、実際には夜光虫の見間違いであった「作戦特別緊急電報」を「敵船団三千隻見ユ。針路北」と訳したのも「私」である。だが、「私」は暗号を間違ひなく翻訳するコードは持っていない、自らの語りについてはここまで見てきたように、書きたいことを言語化するコードを持っていないのである。そして、書くコードがなく「文字にすれば嘘になる」のに「言葉」は書かれる。ここでは、もはや「言葉」を書くことが何かを再現し表象するという二次的な役割に従事することをやめている。にもかかわらず、書く行為は続けられ、書かれるものに先行していく。先述したように「言葉以前」とは「言葉」の前ではなく後に来るものののだが、この場合、書かれたものとは「文字にすれば嘘になる、言葉以前の悲しみ」という本来書かれるはずのないものなのだから、書くことは書かれるものを生み出しながらも、決して両者が一致することは

ない。

もちろん、「言葉」を書くことと「言葉」が書かれることは同一の行為である。だが、この書く／書かれるという一回的な行為の中で亀裂が生じ、書くことが書かれるものをその都度パフォーマティヴに置き去りにしていくのである。置き去りにするとは、モノローグを言語化するコードの機能不全が宣告されることで、「文字にすれば嘘になる、言葉以前の悲しみ」と書く／書かれる「言葉」がそこから「逃走」していくということだ。しかも、「逃走」を開始するその「言葉」はコードを侵犯する物質性を帯び始めてもいるのだから、それはコードから「逃走」しなげらなかつ同時にコードと「闘争」している。つまり、書く／書かれる「言葉」は、モノローグからパフォーマティヴに「逃走し闘争」しているのである。また繰り返すように、モノローグからダイアログへとという読みは、語り手の内面で完結する目的論的な主体形成の物語を読み込んでいた。だが、「桜島」の「言葉」は書く／書かれることに「逃走し闘争」する。こう言ってよければ、語り手の内面から語られたはずの「言葉」は、語られることにそこからパフォーマティヴに「逃走し闘争」していくのである。それゆえ、語り手の内面に還元される線状的な主体化の物語などはとても成立し得ない。

〈逃走し闘争〉とは語り手に帰着するものではなく、書く／書かれる行為そのものの、言い換えれば、「文字にすれば嘘になる、言葉以前の悲しみ」と書く／書かれる「言葉」それ自体にのみ見出せるものなのである。そして、こうしたパフォーマティヴな「言葉」の運動が、「死ぬ迄は生きて行こう」と現在を生きていることを表明する語りと

も共振することになる。つまり、「桜島」は語りの揺らぎや言語化の蹟き、書く／書かれることの不一致などを通して、重層的にモノローグ・ダイアログという枠組みから〈逃走Ⅱ闘争〉していくテクストなのである。

そして、この〈逃走Ⅱ闘争〉は事後的に「桜島」を物語化する読みや言語化の蹟きを短絡的に批判する読みを、絶えず「言葉以前の悲しみ」と書く／書かれるパフォーマティヴな現在の位相に差し戻し、それらの読みがいかに「言葉」と「言葉以前」の転倒に無自覚であるかを露呈させていく。物語化の欲望に対するこのような批評性を持つがゆえに、「桜島」は一篇の〈小説〉たり得ている。

梅崎には、主人公が小説を書こうとして挫折する「山名の場合」(『新潮』一九五一年十一月) というやはり書く行為を主題化した作品がある。その「山名の場合」を含め、「Sの背中」(『群像』一九五二年一月)や「ボロ屋の春秋」(『新潮』一九五四年八月)などの市井小説もモノログ性を指摘されてきた。だが、「桜島」同様にモノログ・ダイアログの枠組みに規定された評価そのものを再検討することもできるだろう。梅崎の作品を〈小説〉として読む試みを、「桜島」だけに限定する必要はないはずである。

無論、そうした試みについては別稿に譲るしかないが、本稿を通して明らかにしたのは、「桜島」の〈小説〉たる相貌が今までどこかに隠されており、新たに見出されることで初めて可視化したわけでは決していないことだ。梅崎は「人間回復」(『文学新聞』一九四八年一月)というエッセイで、「私は傍観者を憎む。われわれにいま、彼岸がある訳がない。現在立っている場所だけしかないのだ」

と述べている。この文章に呼応するように、「桜島」の「言葉」はいつも読む者の目の前で、〈逃走Ⅱ闘争〉する現在を生き続けているのである。

(一) 『真空地帯』評価に関する文献としては、例えば佐々木基一「『真空地帯』について」(『文学』一九五二年九月)、大西巨人「俗情との結託」(『新日本文学』一九五二年十月)など。また、大久保典夫他編『戦後文学論争 下』(番町書房、一九七二年十月)の「『真空地帯』評価をめぐる論争」に関連文献が収録されている。

(二) 和田勉「『桜島』論」(『梅崎春生の文学』桜楓社、一九八六年十一月所収)

(三) 荒正人「椎名麟三・梅崎春生入門」(『日本現代文学全集98 椎名麟三・梅崎春生集』講談社、一九六五年三月所収)

(四) 例えば、渡邊正彦「『桜島』ノート」(『近代文学論』一九七一年七月)、中沢弥「『桜島』論——その時空間と『対話劇』——」(『日本近代文学』一九八六年五月)など。また、和田前掲論文も吉良や見張り兵を分身とみなしている。

(五) 磯田光一「戦後の文学的動向」(『講座日本文学11 近代編III』三省堂、一九六九年九月所収)

(六) 開高健「梅崎春生の場合」(初出『文学界』一九七一年三月。『紙の中の戦争』文藝春秋、一九七二年三月所収)。引用は『開高健全集 第十四卷』(新潮社、一九九三年一月)。

(七) 本多秋五『物語戦後文学史』(新潮社、一九六六年三月)

(八) 例えば、伊藤整は「戦後文学について」（『近代文学』一九四八年十一月）で、「志賀直哉、菊池寛、葛西善藏、嘉村磯多、梶井基次郎、川端康成、そういう正統派の筆力の能率的集成者が、梅崎春生として出現した」と述べている。

(九) 高口智史「『桜島』論」（『近代文学研究』一九八九年八月）

(一〇) 田中実「言葉以前の悲しみ——『桜島』の〈解体〉から〈生成〉へ——」（『近代文学研究』一九九〇年十二月）

(一一) とはいえ、市井小説作家という評価に意味がないというつもりはない。例えば、注一三に後掲する戸塚の論文でも指摘されているように、「桜島」においては軍隊がある種日常性を導入された形で描かれることで、『真空地帯』のように特殊な空間として描かれる軍隊像とは一線を画していると言えるだろう。また、見張り兵の「死貌」は「平凡な、もはや兵隊ではない市井人の死貌であった」と語られており、その死が個別的な差異を抹消され、戦争に身を処した国民の物語として回収されることはない。

(一二) 「桜島」以外の梅崎の作品について、拙稿「梅崎春生の市井小説とその可能性」（『日本近代文学北海道支部会報』五）二〇〇二年五月、拙稿「〈飢え〉とエゴイズム——梅崎春生『飢えの季節』を中心に」（『りりばーす』三二〇〇三年十月）で論じている。

(一三) 戸塚麻子「梅崎春生『桜島』——戦争体験とイロニーの発現——」（『日本文学誌要』一九九七年七月）

(一四) 安藤宏は「交差する『自己』」（『文学』二二〇〇三年九月・十月

号）において、無頼派は「描かれる自己」を二次的、三次的に眺め変えていく語りを用い、第一次戦後派は「自然・宇宙との感応から自己を相対化していく視点」を持つていたと整理したうえで、前者には「八・一五以前」から「以後」を捉え返すまなざしがあり、異なる時間に引き裂かれる個人をいかに眺め直していくかという問題意識が背後に貫かれていた」のに対し、梅崎を含めた後者は「八月十五日『以後』から『以前』を裁く立場」にあり、「戦後の現実を一個の混沌——虚無——と捉え、なおかつその不安定なカオスを自己変革のいしずえとしていくのは至難の業」だったと述べている。しかし、少なくとも「桜島」に関しては、本稿で検討したように「八月十五日『以後』」を特権化しているとは言えないし、また「八・一五以前」から「以後」を捉え返しているとも言えない。「以前」でも「以後」でもなく、「桜島」は現在の位置から読まなければならない。田中前掲論文

(一五)
(一六)

【付記】

「桜島」の引用は『梅崎春生全集 第一巻』（沖積舎、一九八四年五月）に拠った。また、全ての引用はルビを省略し、旧字体は新字体に改めた。

（たかはし けいた・北海道大学大学院博士課程）